

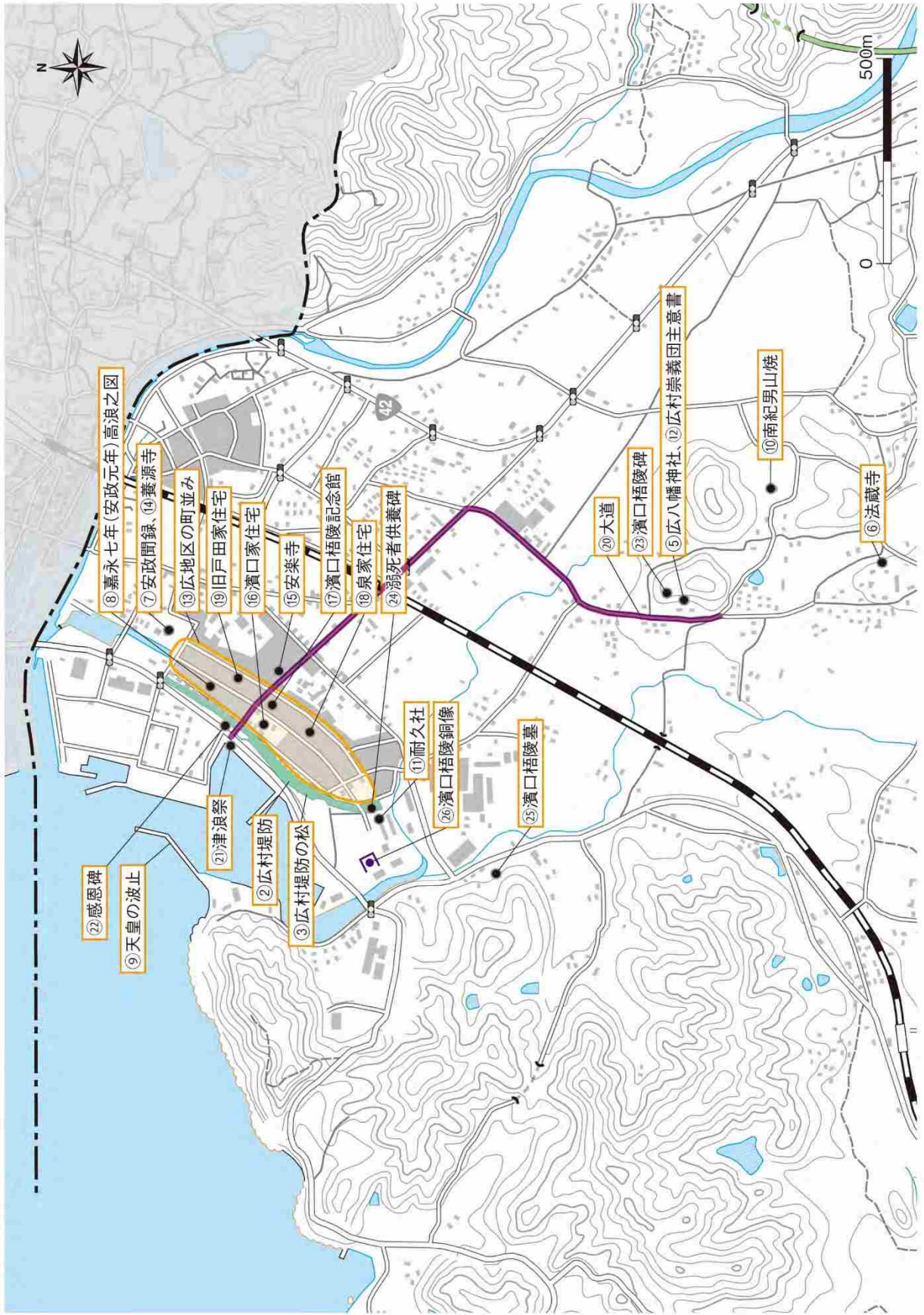
① 申請者	和歌山県 広川町	② タイプ	<input type="checkbox"/> 地域型 / シリアル型 <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/> C <input type="checkbox"/> D <input type="checkbox"/> E
③ タイトル			
「百世の安堵 ^{あんど} 」～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>広川町の海岸は、松が屏風のように立ち並び、見上げる程の土盛りの堤防が海との緩衝地を形づくり、沖の突堤、海沿いの石堤と多重防御システムを構築しています。</p>			
<p>堤防に添う町並みは、豪壮な木造三階建の楼閣がそびえ、重厚な瓦屋根、漆喰や船板の外壁が印象的な町家が、高台に延びる通りや小路に面して軒を連ね、避難を意識した町が築かれています。</p>			
<p>江戸時代、津波に襲われた人々は、復興を果たし、この町に日本の防災文化の縮図を浮び上げました。防災遺産は、世代から世代へと災害の記憶を伝え、今も暮らしの中に息づいています。</p>			
			
土で固めた堤防（広村堤防）	木造三階建の楼閣（御風楼）		
			
災害の記憶を伝承する祭礼（津浪祭）	伝統的な町並み		
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	広川町教育委員会 平井正展		
電話	(0737) 23-7795	FAX	(0737) 63-3081
E-mail	kyouiku8@town.hirogawa.wakayama.jp		
住所	〒643-0071 和歌山県有田郡広川町大字広1500番地		

市町村の位置図



構成文化財の位置図 (次ページ赤枠内拡大図)





構成文化財の位置図

ストーリー

広川町は、起伏なす紀伊山脈が海に迫り、複雑な海岸線には岩礁と田弧を描く砂浜が点在し、沖には小島が連なる変化に富んだ風景があり、豊かな自然に育まれてきました。

海沿いには、幹を伸ばした松が、弓状に緑を描いて並んでいます。昼も日差しが通らぬほど生い茂った松並木の向こうに、見上げるような土の堤防と背丈ほどの石垣が、町を覆い包んでいることに気付きます。土で固めた堤防に上ると、なだらかに裾の広がっている小山のような印象を受けます。

「稲むらの火」

この町は、江戸と大坂を結ぶ廻船や熊野参詣道の要所として隆盛の一途をたどりましたが、深く切れ込んだ湾の最深部に位置し、さらに低地であるため、その繁栄は津波の危機と背中合わせでした。

江戸時代末期、1854年(安政元年)11月5日、突如地震が発生し、やがて暗闇の町に津波が襲ってきました。津波を察知した濱口梧陵は、田の稲むらに火を放ち、高台の寺社に逃げる人々の明かりとし、多くの命を救いました。その後、寺社は、蔵の貯蔵米を炊き出して避難民を飢えから救うなど、濱口梧陵と協力して急場をしのぎ、復興の足掛かりとなるよう人々を支えました。

この出来事は、明治の文豪小泉八雲(Lafcadio Hearn)によって「生ける神(A Living God)」として世界に発表され、その後「稲むらの火」のタイトルで小学校の教科書にも掲載されています。

まちの復興に向けて

津波襲来で被害を受けた人々は、町の行く末を案じて町を離れようとしていました。その様子を見ていた濱口梧陵は、津波が沖の突堤と波打ち際の石堤を乗り越え町を襲ったことから、抜本的な対策のため、新たな堤防の築造を計画しました。濱口梧陵は『築堤の工を起して住民百世の安堵を図る』と述べ、復興の象徴として築堤に力を注ぎました。4年の歳月をかけ、山から土を運び、突き固めた堤防の高さは5m、長さは600mにも及びます。堤防は津波の衝撃を弱めるために湾曲し、港から町への避難を容易にするため、斜面を緩やかに築いています。さらに、堤防の前面には、津波で町に漁船が流れ込まないように、松を1,000本植え、堤防の補修費用を賄うために蠟燭の材料となる櫨を100本植えました。

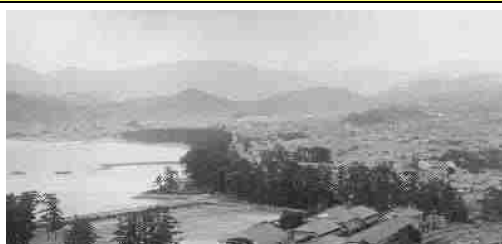
堤防築造に要した費用は、濱口梧陵が私財を提供しました。作業には、大人から子どもまですべての人々が参加し、その日のうちに賃金が支払われたため、被災した人々は安心して暮らしを続けることが出来ました。そして、濱口梧陵は荒廃した田畑を復旧し、漁夫には漁船を買い与え、被災した陶器産業に援助を行うなど、産業の復興にも献身的に取り組みました。

人材育成にも尽力していた濱口梧陵は、津波で被災した私塾を憂い再興し、永続を願って「耐久社」と名付けました。耐久社は、耐久中学校に受け継がれ、今も濱口梧陵の教えを子どもたちに伝えています。復興にあたって、濱口梧陵が結成を呼び掛けた自警団「広村崇義団」も活躍し、被災した人々を支援しました。

防災が息づくまち

港から堤防の切通しの門をくぐると、ゆっくり坂を上り丘の寺社に至る道が開き、道と交差する通りに沿い町並みが広がります。堤防に寄り集まるその町並みは、銀の鱗を並べたように重厚な瓦屋根が連なり、漆喰や船板の外壁、窓を飾る格子の意匠が特徴的です。町並みを見廻すと、漆喰の大壁が立ち上り、入母屋造に紀州特有の丸棧瓦の屋根を葺いた、黒銀色の屋根瓦と白い漆喰のコントラストが印象的な木造三階建の建物がひととき目立ちます。

町並みに浮かび上がる「御風楼」と名付けられたこの建物は、城のような大



堤防の松並木



高台の神社(広八幡神社)



稲むら(稲束を積み重ねたもの)



土で固めた堤防(広村堤防)



耐久社



伝統的な町並み

規模な迫力と風格を備え、内部には折上格天井などの瀟洒な意匠をあしらい、三階の座敷は海のパノラマを借景として取り入れています。

御風楼は、地元の大工たちの高い技術力を結晶化させた最高峰の建築物です。安政津波の経験を活かし、耐震性を高める工夫も施し、柱の支えは、明治期の建物には珍しく鉄製の器具を用いています。安政津波の惨状を目の当たりにした当主の濱口吉右衛門^{はまぐちきちえもん}は、濱口梧陵の堤防築造に協力するとともに、町の人々のために、迎賓施設としての役割以外に、津波災害時の避難機能を備えた御風楼の建設を手掛けました。

安政の津波は、町の両脇に流れる川を遡り、高台をめざし川沿いの道进行る人々を襲いました。被災後、人々は、麓の町から高台に避難する経路は、町の中央を貫き高台の寺社に延びる「大道」が安全であることに気付きました。町の復興にあたって、大道を避難経路の軸に据え、町並みの通りや小路を結び付け、津波避難を考慮した町づくりを計画し、町の再建を進めました。大道が繋がる堤防の切通しには陸閘門^{あかもん}「赤門」を設け、防御機能も拡張しました。

安政津波の避難場所となった広八幡神社^{ひろはちまんじんじや}には、古くから「津波には、ただ足早に宮参り」と言い伝えがあります。被災後、広八幡神社は、犠牲者の鎮魂と町の活性化を祈願し、神楽を舞い、餅撒きを執り行うなど、復興をめざす人々を励まし元気づけました。広八幡神社は今も崇敬を集め、暮らしと結びついた避難場所として人々に意識されています。

1946年(昭和21年)には、再び地震が発生し、夜明け前の町を津波が襲いました。堤防は津波の流入を防ぎ、人々は、燃える稲むらを明かりに大道を逃げ、高台の寺社と御風楼の三階に避難しました。防災遺産は町と人々の命を津波から守り、安政の津波から復興した町の姿を今に伝えています。

防災意識の継承

11月5日の早朝、町の人々は各々堤防に土を盛り、その後津波被害者を追悼する一連の祭礼を、毎年欠くことなく続けています。その昔、早朝から町の人々が総出で近くの中腹から土をとり、大人は荷車や畚で、子どもは木綿の風呂敷に入れて堤防まで運び、堤防を補修した後に神事を執り行いました。人々は、先人の警鐘を、暮らしに息づく「祭り」として受け継いでいくことが、防災意識の風化を防ぎ、災害時には大きな力を発揮すると思ひ、町の伝統行事として絶やさず守ってきました。100年以上積み重ねてきたこの祭礼を「津浪祭^{つなみまつり}」と呼んでいます。

町の人々は、災害の記憶を繋いでいくため、津波防災の心得や先人の警鐘を刻んだ石碑を建てています。神社と堤防に設けられた碑は、「津浪祭」や神社の秋祭りで人々に意識され、世代を越えて連綿と受け継がれています。神社の碑には、濱口梧陵と親交のあった勝海舟^{かつかいしゅう}が「田の稲むらに火を付けて明かりにし、多くの人々を救った」と碑文を刻み、その偉業が今もうかがわれます。町を巡り歩くと、災害の実情を後世に伝えるため、津波の高さを刻む建物にも出会います。「安政の津波ここまで上がる、後日のために記す。」と記録された柱からは、伝承することの重要性が感じ取れます。

2015年(平成27年)には国連で11月5日が「世界津波の日^{せかいつなみひ}(World Tsunami Awareness Day)」として制定されました。津波防災にとって重要な要素は、「素早く明かに危機を知らせること」「より良い復興を目指すこと」「言い伝えや祭りの伝える力を活用すること」です。広川町には、この三つの要素が今も息づき、人々は11月5日にあらためて防災を意識してきました。

広川町は、100年先を見据えた防災遺産と防災文化を受け継ぐ人々の英知ある活動が一体となり、現在もその姿を留めています。この地での暮らしを続けていくために、人々が懸命に築き上げた防災遺産は、濃く彩られた歴史を湛え、そこにはこの町の未来を切り拓く文化が息づき、訪れた人に深い感銘を与えます。



御風楼



御風楼三階内部



津浪祭



津浪祭(土盛り)

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	なばえのはな たかしま けいかん 名南風鼻及び鷹島の景観	未指定	複雑な海岸線と沖には小島が連なる変化に富んだ景勝地。	
②	ひろむらていぼう 広村堤防	国史跡	濱口梧陵が安政の津波の後、後世の津波から町を守るために築いた堤防。長さ 600m 高さ 5 m。	
③	ひろむらていぼう まつ 広村堤防の松	未指定	濱口梧陵が植えた松。津波で町に漁船が流れ込まないように植えられた。	
④	いな 稲むら	未指定	田んぼの稲を刈り取った後に稲束を積み上げたもの。津波に襲われた時、燃やして明かりにし人々を避難させた。	
⑤	ひろはちまんじんじや 広八幡神社	国重文	安政の津波での避難場所となった神社、濱口梧陵は広八幡神社に避難した後、村人を救出に向かい稲むらに火を放っている。	
⑥	ほうぞうじ 法蔵寺	国重文	安政の津波での避難場所となった寺。津波襲来時に危機を知らせた鐘楼と被災民に貯蔵米を供出した蔵が残る。	
⑦	あんせいもんろく 安政聞録	町有形	安政の津波を記録した文書、濱口梧陵が村人の命を救うため、田の稲むらに火を放った様子や避難の実況図が描かれている。	
⑧	かえいしちねん (あんせいがんねん) 嘉永七年 (安政元年) たかなみのぞ 高浪之図	未指定	安政の津波図。濱口梧陵が村人の命を救うため、田の稲むらに火を放った様子や避難の実況図が描かれている。	
⑨	てんのう ほと 天皇の波止	未指定	紀州初代藩主徳川頼宣 <small>とくがわよりのぶ</small> が築造。安政の津波は、港の波止を乗り越え、町を襲った。	

⑩	なんきおとこやまやき 南紀男山焼	未指定	江戸末期に開窯。濱口梧陵の支援により安政の津波から復興し隆盛した。	
⑪	たいきゅうしゃ 耐久社	県史跡	濱口梧陵が創設した私塾。安政の津波で被災した。再建時には永続を誓って「耐久社」と命名した。	
⑫	ひろむらそうぎだんしゅいしよ 広村崇義団主意書	未指定	濱口梧陵が結成した自警団の設立書。安政の津波からの復興にあたって人々を支援した。	
⑬	ひろちく まちなみ 広地区の町並み	未指定	重厚な本瓦屋根が連なり、漆喰や船板の外壁、窓を飾る格子の意匠が印象的な町並み。	
⑭	ようげんじ 養源寺	町指定	宝永4年(1707年)宝永の地震・津波で被害に遭った寺を見兼ねた徳川吉宗が、藩の御殿地を寄進し本堂と書院を江戸から輸送して再築した。広地区の伝統的な町並みの要諦に位置し、安政聞録を所蔵する。	
⑮	あんらくじ 安楽寺	未指定	濱口梧陵や濱口吉右衛門など濱口家の菩提寺である。安政の津波で被災、現在の場所に移転した。	
⑯	はまぐちけいじゅうたく 濱口家住宅	国重文	濱口梧陵とともに広村堤防築堤を支えた濱口吉右衛門家の邸宅。木造三階建の御風楼が特徴的な建造物。「安政の津波ここまで上がる、後日のために記す。」と書かれた柱が残る。	
⑰	はまぐちごりようきねんかん 濱口梧陵記念館	未指定	濱口梧陵の生家。宝永4年(1707年)宝永の地震・津波で被害に遭い、現在の場所に移転。土地を嵩上げし、邸宅を築いた。現在は、濱口梧陵の顕彰館として運営。	
⑱	いづみけいじゅうたく 泉家住宅	国登録	広地区の伝統的町並みを代表する建造物。	
⑲	きゅうとだけいじゅうたく 旧戸田家住宅	国登録	広地区の伝統的町並みを代表する建造物。	
⑳	おおみち 大道	未指定	津波災害時の避難道。安政の津波からの復興にあたって堤防に陸閘門を整備し、防災機能を拡張した。	

⑳	つなみまつり 津浪祭	未指定	安政の津波から 50 年後の明治 36 年 (1903 年) から始まった祭り。広村堤防に土盛りを行い、その後、災害で亡くなった人々を悼み、防災に取り組む決意をあらたにする。
㉑	かんおんひ 感恩碑	未指定	濱口梧陵の町復興の偉業に感謝して、昭和 9 年 (1934 年) 広村堤防に建てられている。津浪祭では感恩碑に献花を行う。
㉒	はまぐちごりょうひ 濱口梧陵碑	県史跡	濱口梧陵の顕彰碑。勝海舟が題額を揮毫し文章を書いている。碑面には「路黒歩艱 君火田畔禾稗以取明 衆頼以免死」と刻まれている。
㉓	できししやくようひ 溺死者供養碑	未指定	津波被害者の供養碑。嘉永 5 年 (1852 年) 安政の津波の 2 年前に建立されている。
㉔	はまぐちごりょうのはか 濱口梧陵墓	国史跡	墓碑の正面には「濱口梧陵墓」側面に「明治十八年四月廿一日 八代儀兵衛建」と刻まれている。
㉕	はまぐちごりょうどうぞう 濱口梧陵銅像	未指定	昭和 42 年 (1967 年) に濱口梧陵の偉業を称え、町民の寄付金などで建立されている。

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること (例: 国史跡、国重文 (工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること (単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること (複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧①

①名南風鼻及び鷹島の景観



④稲むら



②広村堤防



⑤広八幡神社



③広村堤防の松



⑥法蔵寺(鐘楼)



構成文化財の写真一覧②

⑦安政聞録



⑩南紀男山焼



⑧嘉永七年（安政元年）高浪之図



⑪耐久社



⑨天皇の波止



⑫広村崇義団主意書



構成文化財の写真一覧③

⑬ 広地区の町並み



⑭ 養源寺



⑮ 安楽寺



⑯ 濱口家住宅



構成文化財の写真一覧④

⑩濱口家住宅 (安政津波の記録)



⑪旧戸田家住宅



⑫濱口梧陵記念館



⑬大道



⑭泉家住宅



⑮津浪祭



構成文化財の写真一覧⑤

㉑津浪祭（土盛り）



㉒溺死者供養碑



㉓感恩碑



㉔濱口梧陵墓



㉕濱口梧陵碑



㉖濱口梧陵銅像

